

氏名	とく なが まさ なお 徳 永 正 直
学位(専攻分野)	博 士 (教育 学)
学位記番号	論 教 博 第 113 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	教育的タクト論 ——実践的教育学の鍵概念

論文調査委員 (主査) 教授 鈴木 晶子 教授 矢野 智司 教授 田中 耕治

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、教育学というものが、教育実践から生まれ、実践のためにあることを課題とするという観点から、実践的教育学の可能性について、「教育的タクト」という概念を手がかりとしながら教育思想、哲学、教授学の観点から考究したものである。とりわけ、教育現実や教育実践と教育理論との連関を自覚的に展開してきたドイツの精神科学的教育学の立場に依拠しながら、理論と実践の仲介項であり、教師の判断力として位置づけられた「教育的タクト」がいかにか論じられてきたかについて、その思想の系譜を辿りつつ明らかにするという手法で論じたものである。教師の資質として重要な判断力である「教育的タクト」に着目し、その発現形式の解明を通して、今日の授業展開への意義や教師の資質向上への提案を含む論文である。

第1章は、20世紀初頭の代表的な人間学モデルとして、シェーラー、ゲーレン、およびポルトマンのもつ教育学的意義について論じている。19世紀、めざまし発展を遂げた生物学を始めとする自然科学の影響で、人間の人間たる由縁をどこに求めたらよいかという問いが20世紀に浮上してきた。それに対して、哲学的人間学は、生物としての人間が他の動物と一線を画す特質を、道具を用いる実用的知能や言語、精神の働きという観点から明らかにした。これによって、動物状態にあるいわば前人間的な子どもが、養育、指導、陶冶の段階を経て人間になるのだという伝統的な教育観は反省を強いられることになる。人間に固有の精神的な現存在形式の法則に従う発達概念にもとづく精神的な励ましや信頼、愛に基づく新たな教育学の必要が人間学的転回によって提示されたと述べている。

第2章では、こうした人間学的思考を摂取することを通して新たな教育学の次元を精神科学的教育学の立場から考究したフリットナーの教育思想のもつ意義と問題点を論じている。人間存在を、自然存在、歴史的—社会的存在、精神的存在、人格の実存の4つの次元から分析しその教育との関係について論じたフリットナーは、複雑な教育の様相を新たな人間観に基づき捉えていくためには重要な手がかりを与えたとはいえ、被教育者の発達段階や具体的な教育状況の諸問題に対応させつつ、その4つの次元を相互補完的に統合していくための、実践的教育学という視点が未だ欠けていたことが指摘されている。

第3章では、実践と密接な連関のうちに人間を把握した実践的教育学の必要とフリットナーの思想を受け継ぎながらも展開しようとしたノールが特に着目した「教育的タクト」という概念に焦点をあて、19世紀初頭、ヘルバルトにおいて詳述されたその概念の意義を明らかにするとともに、ヘルバルト以後、それがどのように受容されていったかについて論じている。ヘルバルトの「教育的タクト」という概念は、もともと人間交際における繊細な感情や機知、賢明さ、思いやりといった意味をもつ言葉を、教育における理論と実践の媒介項であり、教師の判断力として教育思想に登場させたものである。教育の実際において臨機応変な対応を可能にするタクトは、ヘルバルト学派において感情移入の能力あるいは予感を可能にするある種の自然の才能として捉えられ、教授学の重要概念として受容されていったことが論じられている。

第4章では、20世紀後半にタクトの機能についてその発現形式を現象学的類型論として展開したムートの思想を取り上げ、タクトのもつ教授場面における働きにも言及し、タクトの学習可能性について論じている。

つづく第5章では、教育関係という観点から教育という関係のもつ固有性に着目し、教育の自律の問題を論じたノールを

取り上げ、教育関係を成立可能にするものとしてのタクトの機能について明らかにした。教育関係のもつ連続と非連続という視点は、ボルノーにおいては練習（修練）の問題として論じられているが、第6章では、教育という働きのもつ非連続の形式において、人間的な生の連関を可能にしている「練習（修練）」力の機能について述べ、西欧合理主義の立場からみた「練習」というものへの見方が、日本文化の伝統のなかで言われてきた「練習」観とどのように異なるかを比較文化の観点から論じている。

第7章では、教育的タクトの可能性と限界の双方を視野に入れて論じるために、ノール教育学におけるタクト概念のもつ問題点を明らかにすることを通して、そのタクトの問題点を克服するための視点を提供したイプフリングのタクト論を紹介し、教育関係における対話的原理においてタクトが果たす機能の可能性と限界について論じている。

第8章では、タクト論の視点から、「道徳」授業における問題点を考察するために、コールバーグ理論の概要と問題点を明らかにすることを通して、「道徳」授業をタクト論の視点から展開していく可能性について論じた。

第9章では、教師の専門的能力を、その表現能力、関係能力、活性化能力、強化能力、自己保持能力という形で構造化してみせたロッホの教師論を手がかりとしながら、教師という仕事の困難さをタクト論の観点から分析している。

つづく最終章「子どもとの対話は可能か？」は補章として、アリス・ミラーの「反教育学」のもつ問題点を明らかにすることを通して、「闇の教育学」と「光の教育学」という1980年代ドイツにおける教育の可能性と限界に関する白熱した議論の軸を押えながら、子どもとの「対話」の可能性と、その際に働くべき教師の専門的能力についてタクト論の立場から考察を加えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、一貫して、教師の専門的能力としての「教育的タクト」の働きを軸としながら、教育関係のもつ特質や対話的關係成立のための可能性について、解釈学的教育学がこれまで蓄積してきた諸考察を踏まえつつ分析することを通して、人間学的観点からの教育学の可能性を論じたものである。

まず、教育的タクトを主題として初めて体系的に展開したヘルバルトの理論を、教育関係における教師と生徒との間の教育的距離の問題として多角的な観点から論じたムートの思想を介することによって、教育関係という形式のもつ連続・非連続の特質について論じたボルノーの理論と連関させることを通して、教育的タクトを実際の授業展開や教師の専門的資質の問題として、今日的観点から論じる地平を拓いたところに、本論文の意義を認めることができる。

また、タクトを身につけていく過程に不可避免的に入ってくる修練の要素について、ドイツ教育学とりわけボルノーがどのように捉えていたか、また、ボルノーの考察そのものに含まれていた東洋と西洋の学習や修練に関する比較文化的視点にも注目したところに本論文の特徴がある。理論と実践を繋ぐものとしての経験の教育的意義、教育という仕事に向かう際の教師の精神的態度や構え、覚醒といったボルノーの取り組みがもつ意義に新たに光を当てたといえる。

さらに、教育的関係以前の関係一般において働くタクトと、教育関係において特に働くタクトの双方を人間学という観点から取り上げることを通して、咄嗟の判断や決断の力として個々の状況に柔軟かつ適切な対応を可能にするタクト一般の働きを明らかにすると同時に、それが教育的関係において働くという、また独自の働きについても論じ、教師の専門的能力や知見としてのタクトの機能を明らかにした点は評価できる。

タクトは、実践における個々の状況において、どんな言葉をもって相手と関わるかという咄嗟の判断力でもあるが、その際に、言葉をかけるべきか否か、どんなタイミングで言葉をかけるか、その時の表情、態度といった演技的要素も必要とされるものである。教師のこのような様々な決断や判断の重層的な組み合わせが可能となる場としての教育関係、その関係性において相手との距離を押し量る能力の働きなど、今日の道徳授業の展開においてしばしばみられる硬直した状態を打開するための方策をタクト論の視点から論じた点も特徴的である。

タクトは理論と実践の仲介項として、理論が開けておいた場所に入り込み、理論の知見を踏まえつつ、個々の状況に適切な対応をするための方策を導き出す教師の判断や決断の能力であり、教師のその場その場の行動として表われ、それがまた一連の行動様式として形を為すようになっていくといわれる。この理論と実践の仲介項としてのタクトの働きに注目することを通して、教育学および教育実践において果たす理論というものの位置づけが今一度再考されるべきことへと本論文は議

論を促すという意味でも評価できるものである。ただ、その際に、実践の中で働く理論の具体的な有り様について、さらなる論究が期待されるところではある。例えば、詩の授業や童話を題材とした授業において、生徒から予想外の発言がなされた場合にどのように臨機応変に対応するのか、予め設定された授業の趣旨や方針にそぐわない形での授業の流れができてしまった場合の対応の方法など、タクト論をめぐる様々な考察を通して、具体的にどのような形でのタクトの働きが可能なのか、またどんな問題点が生じる危険が予想できるだろうか、など、実際の授業場面におけるタクトの働きについて、さらなる展開が期待される。

また、タクトの働きのもつ有効性や有用性を積極的に捉える立場からの論究であるために、タクトさえあれば授業はみなうまくいくという形でのタクト論の流布に歯止めをかけるような考察もやみられるものの、タクトによって理論のもつ曖昧さや教師の力量を補い得るという形で論じきってしまうことで、理論の精密化や教師の力量についての精密な分析という方向での研究のさらなる原動力が減退してしまうという事態もある意味予想される場所である。今後、認識の問題としてタクトの機能の詳細な分析が求められるところだが、そうした分析は、今日の大学における教員養成におけるタクト養成法の開発といった形へと結びつく可能性を拓いていくことになるであろう。

さらに、アリス・ミラーの反教育学をめぐる論議を踏まえたタクト論を展開したという点で、本論文は独自の視点を得ることができているといえるが、さらにその後1990年代の近代教育学再考や反啓蒙主義、ポストモダンといった思想傾向を介して生じてきた新たな教育論議を通して、著者の捉えるタクト論や教育人間学の意義、解釈学的教育学の可能性などにまで今後さらに論じていくことが求められるところである。

以上、いくつかの論点および今後の研究の進展に求められるべき点などは指摘し得るが、博士論文として、その価値を損なうものではないと考えられる。よって、本論文は博士論文としての水準に十分達していると認められた次第である。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年12月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。